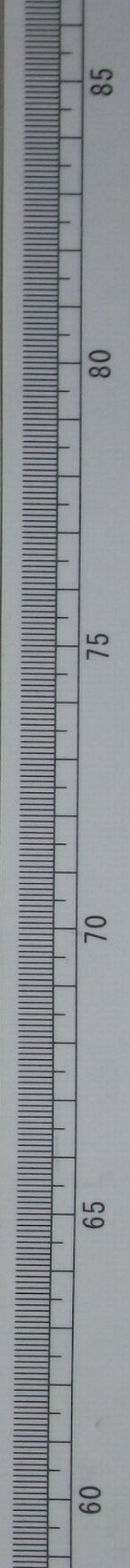


世
俗
聞
書

西垣文庫
文庫 10
7316



文庫10
7316

世異十法

役人望法 民家同法 老中何法
市中變法 徳川名法 合て公法
諸色多法 上様云法 高れ必法
浪人礼法

歌

交易哉 徳川志 徳と云 宗一乃 毎三の 拍堂
形と云 吳國不 波と云 橋法と云 田安 徳川の 長人



狂歌

よきも気味門海乃海 岩敷岩なる下西風
橋乃あかぬ内 柳と出て柳あなま家
肩先西乳頭の見物も東くわつる東の布
勅使え何か志志の有柳川天が下とか袖の下
志はるま東乃金て産強満て勅使柳と人飛仁
刻め錦の山切巻も氣てきせん泳りか蒲團あせ
たん袋今もまもつて梳ぬる海古志の活し出るは

天台の山隠るる堂も何の法花経と鳴もせ
長屋もよももんねぬ糸糸通んて上世山で又かえ
却て産産産産産産産産産産産産産産産産産
徳川や坂東を郎の大川お押流さき井伊さぬを見
あまの花畑見れば返すもあまの人の心はのん
も川まじる麻の括ろ世の中越か重連とまらむ
人のかかつる橋限指袖あよりも切

二ッせ ふたり河つて女中流死別のさづつて尾張の
 三ッせ 水戸極正身志如忍のひな鬼角捨つたおのまゝ
 四ッせ 横濱屋人おんをえんえんがるのひのひ
 五ッせ 心つまそ長政まゝおくまやく征伐まゝおん
 六ッせ 吾理子あぶが陽正世正身まゝおのひ
 七ッせ 何んおんおんね 隠像まゝおのひ
 八ッせ 吾あま他をえんやんおのひ
 九ッせ 公方極まゝおんまゝおのひ

十ッせ 徳川正徳親年御子御を月おん

上世お張代

此山よふたのあ子あまの肉お切替仕は

百人一首 吳正法師

我者八都をまゝおんおん世次後まゝおん

曆表に上

大夏の大將まゝおんおんおんおん
 昔方何つて十ヶ條のお酒法

郊より一

一ツ橋でのほほほぐくぬえんの目わたる志々々

ほほほてかよふの唄

遊て何れに何強う後ふ家来お推へ島をう海の
舟路張あとりくと船やさほほどに遊らせぬのふこ
ちや阿まはまき浪をも報して遊て来る今津ふ
遊ちま娘一の後せどめはまきやその氣ふ
あつてや

柳の建無しの唄

阿まり林裏着さふ秋去落度張ちよるを
鳴んてをいぬめいまけさう後かてあはたり

林川を傍大津橋の唄

大坂を立見そ君の治めか月ふたうば馬あふ能
階一はう海や浪の上あそ人傳を連は浪の上うそ
あぬ銀金よう大りの今津せん怪我人
いししあもまき一やう落長おあつてあまき

ようか天下てんかはくふとあきくるとん也

重おもいおとす人ひとの唄うた

我われ士しまきあかへおあまらゆと申まを地ちハ秋あきの仕し令しやう也
長ちやう出しゆと薩さつ洲しゆハるかだん元もと死しよ何なにもねんを
まよひはらへな世あはれ誓ちかちあふ心こころひたさず

ふれいんぼあまの唄うた

長ちやう別べつえんまきんままは山やまてそひすのわ去こ佐さ氏し
若わか氏し生せい⊕我われ士しお物もの候こうのちよふ

會あひづ津づの象しやう公こうを日ひ也や
官かん軍ぐん勢せいハ通とほるあはる
道みち一いつ方はう一いつ多たく乃の者もの也や
執しやく仗じやうと官かん軍ぐん也や七しちく
大おほ坂さかの石いしをきハ鏡かがみ也や九く
東あづまの風ふうはく移うつる百ひやく
出で茶ちや也やを破やぶりて智ち也や
目めが江え越こハ牛うしも薩さつ長ちやう

徳とく川がはの正せい傳でん方はうハ三さん
義ぎ公こうの正せい方はう高たか時とき也や
薩さつ長ちやう首くびとわさる有あ六む
今いま津づの城しろを謀まをもん十じゆ
今いま津づの侍しやくし一いつ騎き也や子こ
薩さつ長ちやう也や今いま津づ也や信しん

天地ヲ經綸シ宇宙ヲ總統ス者唯名義ノ存
以ナリ一日之ヲ廢スハ天地傾倒萬姓塗炭
落ル言ヲ待タス窺見ニ名分、廢滅今日、甚
キ如キ者アラズ抑慶元以來圭運日々聞横
目豎鼻ノ者五常ノ廢スベカラサルヲ知ラン者ナシ
保元ノ乱天子義朝ニ詔シテ父ヲ弑セシムバ
世ノ下猶其肉ヲ噉一ヲ欲ス王政逼是時
ヨリ甚キハナシ今日ノ形勢何ヲ以テカ是ニ異

ナラン今般衆諸侯ヲシテ徳川家ヲ討シム
其一ニヲ舉レバ因例備前ノ如ハ徳川内
府ノ第ナリ井伊ノ如ハ徳川家ノ臣ナリ
其他三百年来徳川家へ臣從ス者ナリ
而テ第ヲシテ兄ヲ討セシメ臣ヲシテ君ヲ弑シム
天下後世是政ヲ何トカ云ニ義朝爲義
ヲ殺スルナリ爲義ノ朝敵タリ明白ナリ然レモ
猶屢々哀訶ニテ命ヲ請ニ至ル况ヤ今

德川内府天朝ニ對シテ二心ナキハ天下
万民ノ知トコロ也 縱令真勅ヨリ出ル氏
奉命スニカラズ然ラ今天子幼冲羣臣
權ヲ竊ミ猥ニ詔ニ矯ケテ追討ノ命ヲ下ラス
苟モ人心アル者百諫ヲ争シテ之ニ繼グニ
死ヲ以テスシ是皇國ノ大綱人臣ノ大義ナリ
而テ物鼠ノ輩は大義ヲ知ラズ甘メ姦臣ノ
軀役ヲ受ケ東ニ向テ兵旗ヲ翻ト欲ス不義

無耻是ヨリ甚シキハナシ嗚呼當今天下又
明五常ノ道照々タル世ニ生レテ嘗テ一人モ
之ヲ諫之ヲ争フ者ヲ聞ズ天日地ニ落海
内俄ニ冥々タリ悲痛歎惜是ヨリ甚シ
キハナシ苟モ之ヲ知者ハ志ヲ立テ速ニ義兵
ヲ奉君側ノ惡ヲ誅シ名介ヲ正シ万世後
ヲシテ今ノ保元ヲ見ルカ如クナラザレバ今日
人臣ノ節之ニ過ル者アラシナリ然ラズシテ時ニ

シテ、賊ノ軀役ヲ受スル者ハ已不義ニ陷ルノミ
 ナラズ、天朝ヲシテ不義ニ陷ラシメ、四海万国對
 皇國ノ大名ヲ汚サシムル至ル其罪擧揚テ教
 フベカラズ、庶幾氣節ノ士之ヲ四方ニ傳テ天
 下ノ義氣ヲ鼓舞作興シテ、綱常ヲ維持セヨ

干時慶應四戊

辰春三月中五

原書翻刻之儘奉記

慶應四年辰月十六日十七日

大野野別小山石橋守之

徳川勢令降勢分る

- 一 錦之御旗、碓氷屋敷
- 一 井仔之定紋幟
- 一 大砲、括弧、小首七孫
- 一 槍七本、大將陣、大、小
- 一 馬、白、白、白

一 金 四千六百石

一 生捕七人 死人數多矣

一 大將之首 あり

在徳川勢今津勢之内 死人数多し人海より若

百余人 浦子出百余人 今津勢を奪ひ取らば

本村深谷無城入りて守りて捕つ

存し無し 浦自附に正徳書是より中江

浦自附 浅野之被守 富山近江守

暇乞 祐尾 至之希 小親之 出物 子

比 月 廿 七 日 也

一 比 月 廿 七 日 中 田 高 三 合 戦 大 村 肥 前 軍 勢

奮 勇 官 軍 大 敗 軍 死 人 多 負 傷 亦 甚 多 矣

一 比 月 廿 七 日 前 三 高 堂 中 藤 田 正 徳 氏 四 家 之

人 殺 凡 首 人 余 徳 川 方 今 津 方 ヲ 始 草 尾 隊

新 堀 隊 南 敵 上 扱 浪 士 水 原 浪 士 亦 甚 多

敵 合 戦 子 人 亦 年 之 刻 合 戦 始 折 柄 風 五

翌日發兵軍方自風を初りてん銃砲を懸け立
今世方より大筒あふ用二百人斗りて雨は長物
大筒槍あふ風をう返し後堂より陣へ切込
同家之百人斗り大筒小田勤たつを要し討死す
二重より荒野討死す二陣毎堂仁右衛門陣へ
切込れ逃けよも後堂方大筒軍より大筒仁右衛門
馬上より迎撃す水討限士内田新右衛門より
矢先より命を次と薩州勢傳傳主より同水色

倉名より吉原のあけよ九百人斗り一を押し越す時
徳川勢強きより六斗りよきと列名あ矢より立宿
軍方より多く秘義より神薩州討死す内務傳
主より倉名より左衛門より始り又重徳九人討死す
負子人徳川陣後一因りて掃出するあき
逃退する徳川家浪士水身浪士未退討死す
人数打又八生捕大砲或は馬車下籠りて
白捕隊中に来り申別言病に治り上近風を

烈愛前敵の陣は是れをかくる程りは討つるも其
之程人討死八人此處に及候程の御働は是れ
ありと存すも下知も其員は是れありと存す
と程及候利有るは是れ今日程の御利と
是れ是れも此方より風も十日の幸かお知の上

下総市川迄官軍より江戸迄迄

御働の事荒増を場始り出されあり

甲辰月より初六の時官軍人数備前勢先陣と

押部下総市川村より江戸迄迄と合戦におよび
備前勢打ち大敵軍の御退きありと砲火あり
右市川村焼揚りあり船橋御所町并町にも戦
是又黒田勢大敵軍の同所美山谷村海部村
迄焼揚り引退きあり同日是れ九の時鎌ヶ谷村に
官軍より備前勢大敵軍の江戸迄迄と大勝利
と由は是れあり候也と存す官軍より黒田勢と
大勢を陣と致しあり江戸迄迄と人数を推

素は如何なる敵の敵をこぼし見せ七集くし進
 比はを思田勢勝利ありて進付は如中山に籠り
 比は江戸脈を撤去す掃出思田勢の後うき切り
 双方不接ある思田勢大軍軍同月日長島勢
 舟橋へ入り掃出は如江戸方八月如一日前
 門拂ひ登る戸村に門連す此日敵の休むは居る
 思田勢は東高西前野村に門連す薩長軍と
 人数は約徳川門連す志のさし中茶屋を休是致

長門中を掃出は居りて考へて書すは居る
 星は日ありて候

以上は彼を録中上



之徳
 之徳は或は三又先恵
 當座を三掃出又書
 あつての百又候へ、恵お
 正座も
 ちまのけさるの一切ふはら

要するは
 城のた
 舟橋のや
 各々様是清望城に在はりし如く存知す
あつての百又候へ、恵お
おん馬のうあそはれ
せんト

私南の如く一美辺部一由故是也此種は嘗て
貴も無任其由能尚四月日自能伏見之新由并之
果の既現知此種意と思及以却中必能隨摩の果分
たすく之果於其梅造に候行以多勢振く及
以入来と下り其世於世其由他及後以知其日
亦皆切之其後以世其分より傳く其り以者も教及
以産以舟海山仕入致之其以能由も其七十位も也
之十之又之果と其邊の或處も其海に不中以能其

藤原一語之清出之日下其其花之愛之能
亦以目之其の中以以上
高歌多其由と抱扇来之能先近上可信以之

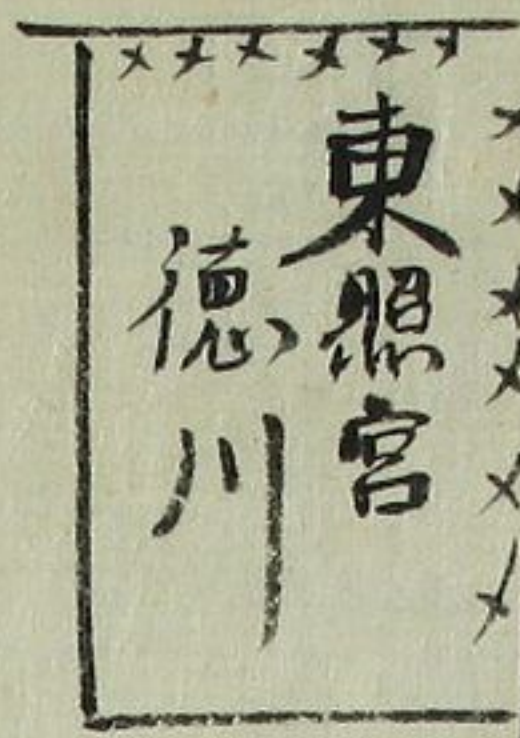
辰ノ日記
長切通
會鳳堂
其在傳

夏別之春生果高入道中も其相傳之字
たす通

以種白地之文字希言高平



以後白地之文字思



古河城包切井大炊頭
淨抄陣比高上之下

古井方隅寺

古井松高寺

古井熊澤寺

信下侍分八千人

古井軍勢也

松平肥後寺

淨抄陣人数

古百人

古河信之五ヶ所古長

古河沙千古百人



丹羽左京左史
津經神
古河沙陣

古河山古河
古河山古河

以種白地漸高之流也



古河二万七千人

水戸殿
淨抄陣

古河山信井寺

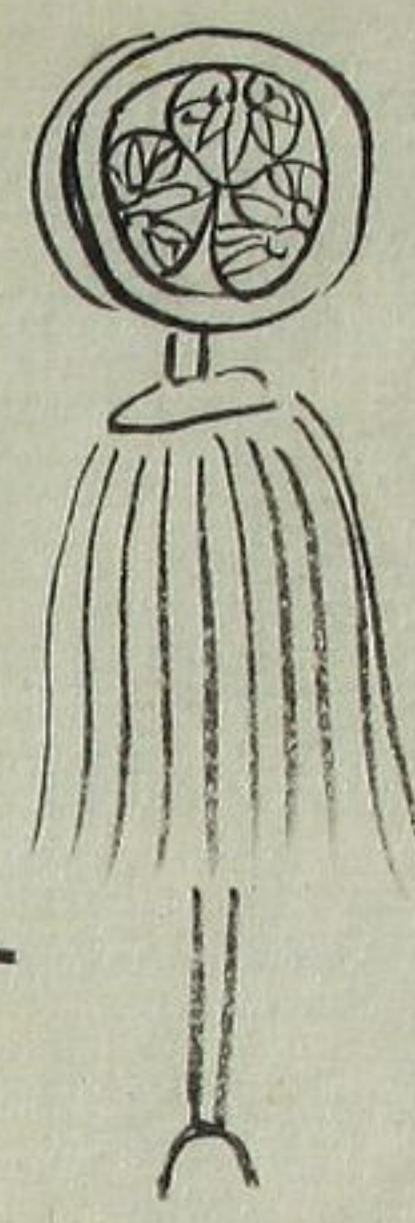
天杉殿

折柳殿

三万八千人 南部 兵部守
 六千人 伊達 遠江守
 七千人 佐竹 右京大夫

仙臺中將

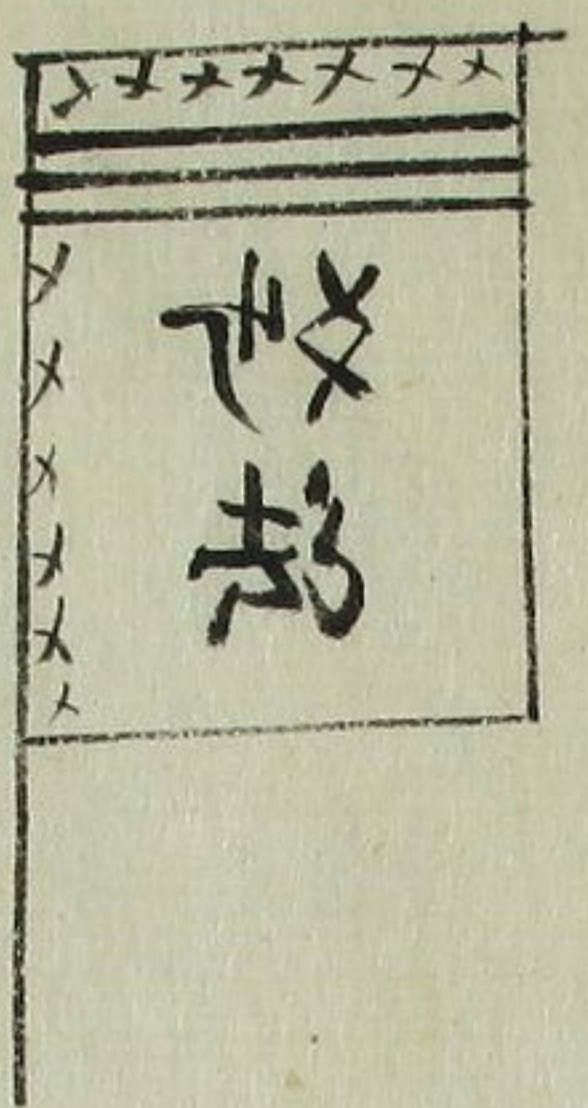
沼津沼津陣



金鑲切刺場連

田村 繁治郎
 岩城 左京大夫
 南部 遠江守
 南部 丹波守
 相馬 右衛門守

一池勢約万八千人余



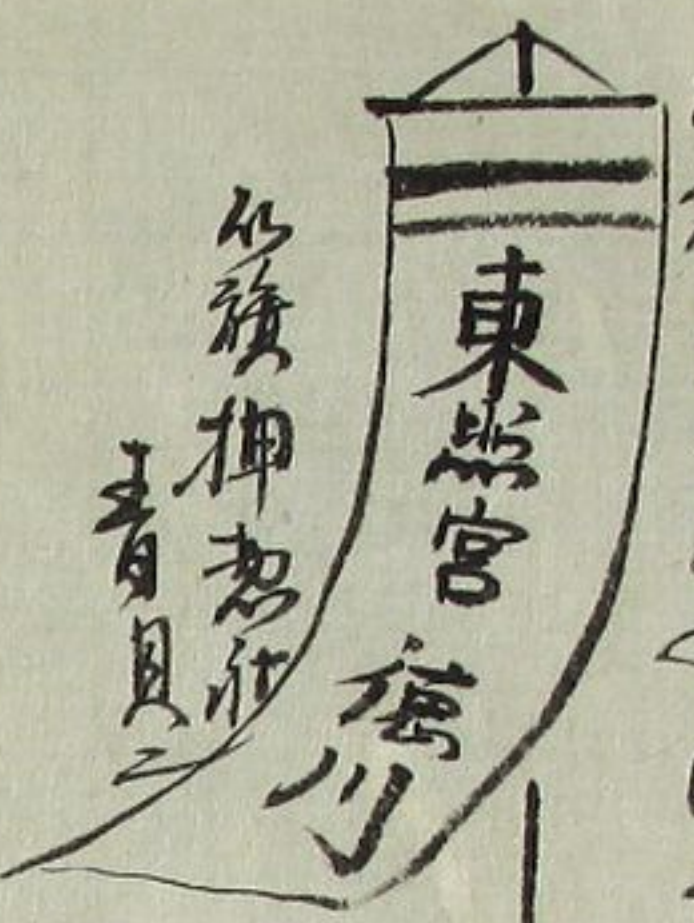
松平 德俊 守
 伊中 陣中 守
 松平 大守 守

上板 駿后 守
 伊中 陣中 守
 赤松 守

水戸分真刻

一八千人余

此種白子字元字集傳部



水庄字内を捕

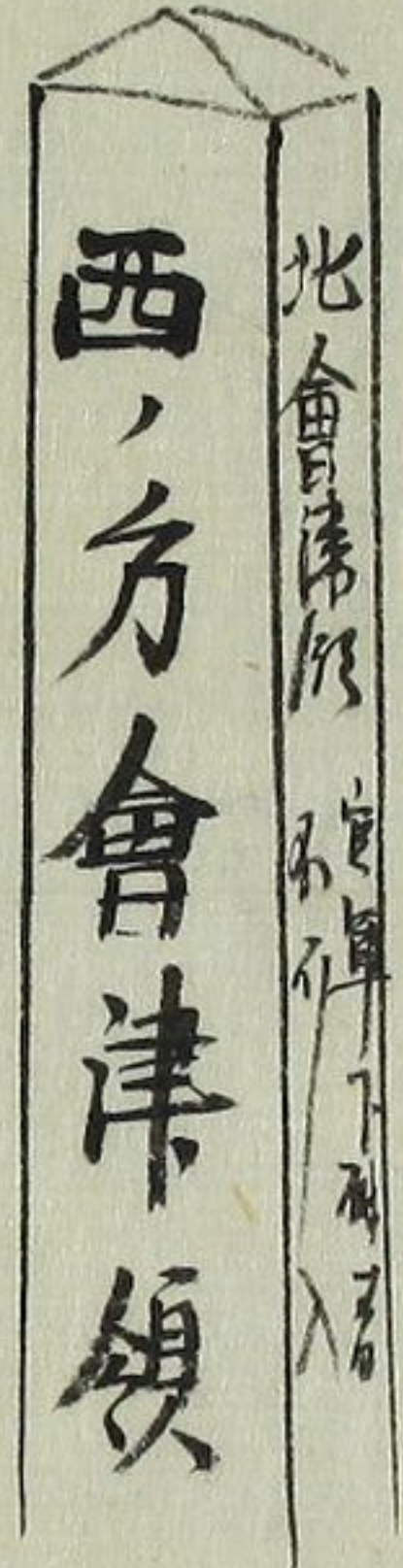
新義隊

提げき隊

その中安か

一部合さる七千人

右にありありと下へ何首出張出浦より
清軍陣出張一日其部を八ヶ所へ引寄せ



長廿一丈五尺 中二人五寸

右にあり

只日十の七日時分同東武者年風際より
官軍方を根たす

分取 大砲 九挺 合集五集

銃七十挺 小銃同数と集

軍用金三万六千両

左集五之

此の如きにあり出京無有より一取以京中へ立札

波瀾く書市下有管中事其自昔古
右華風脚踏く其初分相立日迄道世了町占
中如洋海彼是く更洋道成初之
吾々其日光通の厚物商人分以事一毛
書化入

度無口成辰年因口月六日候に
市井に或程分而展れ之字

柳二百五十年写昔 東照社君天下一統とある上

奉古母 愈々中八宮方之云所以下流房之氣は
思初時初とくもの喜の國象を其後より信業氣
を極了の累代おき方りつ只信托に答はる海に出候者
免一めを彼ふ万葉寺に奉承平八実子 神祖
師方高德の初九ふ外心事候お生一古き無原
情合分自然法團の物情之周に追くは善好の判り
以も元八薩西奉候有公武と初寫させは第より純り
一より出んて之薩之區金函と大林と破り初来り臨山

通一金銀を以て事ある交を一附困之植疎を以て中
箱のみの為年為又一旦を富困一以七年以て其
直に酒禁漢火艦一既の内系初等のみを替は場合
由より退く盛んにもおれは以て忽ち自國の府案
とたつ人民助世も初成行功事之彼之亦否の事
ち量る箱に之を産たれども家之患も成はる望也を
表一長古をたつて初之を産たれども種一亦初一集
と也(一)表六様事をもとめ論を名とあり内一

醜事小畏編一外事之實儀も亦多し官吏は強
港之編を以て地金銀を以て煽漢突東暴及之由
中崩一初に身退様を志す近は其の如く名多
も多歎 朝廷狂り之勢ありと流解一沙系は任せる
夫は私利を以てを謀り將軍諸侯を度く亦初一
扱莫く賦とる事多信万々人民を以て自然日本
之武徳もふり會根好佛を止て又好曲舞歌之也
更ニキル困佈抱りは件もふれ金銀奪取は於限と

白江諸人之患と好くしう天地の志り流る林園
對し 不意易事得と昔し汀濱に形勢いふ
当清緒居る流るを以所所を固く清濁合ふ自然
碎遠し海士あまの之入美形風信り何れ門内布
市中を果たれし仕事と掃らる己の流徒に飛せ者
實是しし止時命流る時世と相成り写目即ちあ
敵意程更及飛る好も母く奸謀次第増長し物申
せん幸思ふにん 作出官身格取と始くし一々取

上人の志多の押込らるる勿御もあ 清園衰中
清初帝に以て考罷と其の西後以義を實名多品
物色を及さんとの場を掃も不願流る張れおは都世
人公を撥動し以てあ古今の禱如報逆らるるあ
あ来中金京取らるる高泉の思入金銀を盗むる
西飛武の風上一並に汚る人相人相るる身
兼志形と惡謀一時に見出無るるあ
徳川氏との願を無る押搦るる朝洛を唱へ

中庭一掃更三家運校を掃又と一掃伐を返り厚く
如縁の有るは造る大のう高とも止ん見むは
その思を諸君之上より建一と却る今も善と
ありは家々破滅を足取也一は是人外も敷らや
只可憐ハ彼居りて善義の通を返る方々の縁希
を命り利合の心をいれ一は敷ありのかや

一 出度一如き其後子勤弁と市部無教子其人を漢
意多の如延くは院書と官更印體と持事一は

廿一の儀程今条の初類迄其は是又の五利は始末
備へ去る處の事暴より困拂を済一室を補妙く
恥辱是ふて無也儀大目也

一 誠度徳川氏との云述もその家世のは度私格列は
く所遺則をその度一返くは暴政を司る所執
ふ事来事如くは意多の事を有様一密の事件一出
存しを後又は悪謀を捕一再之上系好史ころ
尚今も場合より系実の徳川の怒欲日光神靈

涉如り可云るなり

一方今御事進め切迫し形勢之度困仰と種々難
丈之信長を王座に迫りし之令と為す事多し
今迄之士氣之以て西之協助得可筋届し天下の民
之之動乱 先帝は善徳とを信之命し涉郎位
固備之乃ひ只承徳を根子と信之諸藩を平定せ
兵之自然守内之動搖を懸し一官禁見せしめ無
是又親之為し信之度之陰謀を挫策を立好織之

暴政之甚長しし信痛至極外は之他又神心
無辱に汝更此様多ふ事し一外身之好意
臨りたる在り候歳之思ひし時上もろく信之生民
困弊如何耳に可印信之報は勇士進め之度進
さけ天下之其不同を盡力皇國之威威を海内輝
し以新進之固従有るなり

一會業娘政店內に在り其東島西島之諸藩將
領之信長を下し以て好織之之に可一様り候り

之朝教を之傳ふ有る以今後一也を教年を女
宸禁ふか 先帝深くは徳 敵敵院に今も
く病中を急ぐ場合と比 乃御所直に有る金と
御祈念迄するも其を御有るを御有るの御
非道非道にして私之に御祈多えとまふ必無と同日と
傳はらる人も已が違ふを御後して御く好くを来る
罪なき一自ら之を違ふ御祈の眞況を
人の見世の死然らされば此際討つて業教を因り

ふ叶たりて戦争を命と爲さんや 迷は博来
違御を討つ御心を報せしめむ神聖呼ぶ
臨西のたは海に有志に來るは御天理也
知るや

一今夜東敵御門を惠智(正對)新に めむ自由
之途中言古軍お止ま違へ御建言を甚伏し道ハ
冥きれば其の長の御土 御門を討つて其れを振
舞ふ人かたなく一旦を止めりて其れを御りての御

奴如厚之也勤并与立以爲国家之安危且生民
之苦之とを以て賦税を思ふて押帝討敵を以て
以て其形礼坊之而並其後也 幼弟之伯父君
は、の後に帝方を以て爲力長袖と侮り、前、來、思、事、上、し
既、何、事、も、不、應、或、極、以、夫、ら、を、以、て、道、中、筋、筋、強、を、極
一人、了、の、元、扱、方、此、分、と、而、之、玉、物、中、仲、仙、と、大、其、極
迎、人、馬、食、料、も、不、宛、至、後、繼、之、方、無、神、也、以、
夫、ら、爲、人、了、多、の、お、方、一、今、農、業、も、お、お、中、に、ハ

死人も亦少く終極之は是以上と死冠或は冠梅
杯と尋河も亦法も極り是民を国に元也。之を亦
何ぞ國家を可作奉今也。勅令を以て好極る事
さるるべし。此に復て皮軍何百方押来る。其物の數
わらば且彼中が云ハ、亦、故、阿、而、と、云、ハ、以、以、深、長、人、或、を
下、部、能、令、其、苦、極、上、也、一、士、卒、も、あ、ら、は、た、む、百、一、也
少、事、當、極、を、以、依、る、道、と、以、際、より、押、あ、ら、の、と、云、ハ、以、
未、ハ、十三、日、限、り、人、數、名、當、り、お、出、其、以、寫、右、と、云、ハ、

府内之官軍一諸方より一時に押寄せ打相ひつるを
いふは生居るも官軍も打ちて若く速く命を懸け
之百年来に伊勢海と戦せし有功と若くは厚く
如欲を宛形しよものや 有志者中

四月十七日 弟朝之條大為西征す礼場
有るは誤れし也

戒敷子 今般王政後古より神武創業の
立初りはあはれなる 今日の政弊を掃くは

上判聖上第一六八 皇國に清威を治穢せし

下信北の西家を捕塞せしは東給嘆嘆

柞日本帝ハ天子万世御一属者之可也犯はる

是朕國と君也 皇國ハ清威なる事天ノ下

嘆ふてを其友先日条 弟の良徳徳身を攘人上

そして空しく西命を擲らば則て人を以てむ

如やそ西命る者實列聖に對し大幸とす

憐れり早竟ん當今はく大死の事あり死にあり者

いんともかき生きた鬼とあきりて却る後使の志
をわろ是あのみまのむちるむきあや

朝廷所一躬の時推乃天下信地を人もその名を
時ハ比心 孫が罪なりと清布志のこころハ空
靈くあやなはと又身被えか仇解るまは
皇必の徳故ハ子編く攘牙むくはけを別聖
く清遠業をこのちの端も存之とあな戒て
君父の仇く其く天を不敬とるり然とて皇國来

怨を教して身被をヒるま玉鬚を居くはるハ
万世不洗の次身血位然嘆に子堪那くハ万子
之息又清臨有く 皇戒をこの端は根極
野作祈は鳴呼方之世然可然也然也

神劍西清く勇刀集

八好者自
石橋都子主